

小牛田農林高校・講演「<リズムよみ> が教室にもたらすもの」
—いかに書かれ、どう読まれ、そしてどう受けとめられたか—

山田昇司
(朝日大学 英語研究室)

My Lecture on Rhythm Reading at Kogota-norin High School
— How it was Written, Delivered and Questioned —

YAMADA Syouzi
Department of English, Asahi University

<目 次>

- | | |
|--------------------|----------------------------------|
| 1. 気も荷も重すぎる代役 | Tough decision |
| 2. 書いてると見つかる新たな発見 | Humans think by hand. |
| 3. 寝てても浮かぶ新たなアイデア | Humans think during sleep. |
| 4. 「すべて読むべし！」 | Read the whole script ! |
| 5. 中身がおもしろければ伝わる | Content is everything. |
| 6. アシスタント用原稿をつくる | One more scenario |
| 7. 到着メールを打った理由 | Waiting in patience |
| 8. 日本人なのに日本語が分からない | Are you a Japanese? |
| 9. 「愛してる」とは言えないのに | Masked conversation |
| 10. 日本語を耕す英語の授業 | The moon is beautiful. |
| 11. 「全て英語」で見えないもの | I was laughing together, but.... |
| 12. 教科書教材の限界 | Too short for the whole story |
| 13. ローザ・パークスの描き方 | Not just a tired seamstress |
| 14. 画面がずれたプロジェクター | Standing on the disaster site |
| 15. うなづきながら聞く顔 | Messages are reaching. |
| 16. 「それでは話が終われません」 | Unexpected answers |
| 17. 「セン」はひとまとめ | Don't break the basic! |
| 18. リズム記号と「切れ」の位置 | Not just the way they are |
| 19. わざわい転じて | Good luck after bad one |
| 20. 教科書の「リズムよみ」実践術 | Transferable ability |
| 21. 重箱のすみ | Start from the basic! |
| 22. あっという間の三時間 | Had I had a recorder |

1. 気も荷も重すぎる代役 **Tough decision**

12 月末のある日の午後のこと、私の研究室の電話が鳴った。私の所属する研究会 JAASET の代表である寺島隆吉先生からだった。寺島先生は岐阜大学を退職されたあとも各地から講演や発表の依頼があり、最近では京都大、甲南大、南山大で行っておられるが、今回の依頼は宮城県の高校からの講演依頼であった。(註: JAASET: Japan Association of Applied Semiotics for English Teaching 「日本英語教育応用記号論研究会」、略称「記号研」)

「宮城県の高校から 2 月のどこかで講演をしてほしいという依頼が来た。僕はこのすぐあとに広島大学の先生から頼まれている講演があって忙しい。山田さんが代わりに行ってくれないかい。」

「えー、私がやるんですか。私では寺島先生の代わりは務まりませんよ。」

「頼んできた佐々木という先生は山田さんの書いた本も読んでるし、テーマは〈音声を楽しむ授業〉というのだから山田さんの最近の授業の様子を話せばいい。」

「でも私はそんな講演はやったことがないし・・・美紀子先生がされるのがいいですよ。」

「美紀子は寒いところは苦手なので行けないと言ってる。」

寺島先生が手術をされてからまだ体調が万全ではないことは分かっているし、美紀子先生も冬場にはときどき風邪を引かれて顔に大きなマスクを着けておられることがある。私は以前に岐阜地区の高校教員対象の研修会に招かれて話をしたことはあったが、今回は宮城県で「教育実践モデル校」に指定されている学校からの依頼である。私は本当に自分がその代わりをできるのだろうかという不安な気持ちがあってすぐには OK と言えない気持ちが強かった。

しかしまた一方では、自分がこれまで寺島先生からさまざまな励ましや助言の言葉をもらって教師として成長してきたことを考えると、寺島先生の勧めにしたがってこの講演を引き受けることで自分の新たな可能性が開けるかもしれないという前向きの気持ちも出てきて、最後は思い切ってやってみようと思いついた。

2. 書いてると見つかる新たな発見 **Humans think by hand.**

1 月下旬のある日、私は後期の成績評価提出を終えてから講演の骨子をメモ風には書き出し始めた。そのときのメモには「リズムよみ」を柱にしてこれまでの実践が高校の赴任校別に抜き出され、その次には大学に来てから七年間の指導についての記述がある。

私はこのメモを作るときに久しぶりに自分の実践記録『授業は発見だ』(2005)を読み直してみたところ、忘れかけていた当時のエピソードが次々と思い起こされてきた。そのときに私は山県高校でのリズムよみ実践について新たな発見をした。キムさんという ALT と一緒に行った授業で起こったことが、実は「A させたいなら B 指示せよ」の典型例であることに気づいたので。

また今年度、学生に書かせたレポートも付箋をつけながら読み直していった。入学時の

作文「英語と私」、前期の授業レポート、それに出されたばかりの後期授業レポートである。さらに9月から10月あたりで記号研の掲示板に連載していた原稿も改めて読み返してみた。すると講演で伝えたいことが次から次へと出てきた。

ちょうどその頃に入試の仕事で午前中ずっと会議室詰めの日があった。このときに幸運にも隣席になった寺島美紀子先生にいま述べたような「発見」や「伝えたいこと」を聞いてもらうことができた。「それは面白いわ」「それも話すといいね」と相づちを打って聞いてもらえるので、私は調子に乗ってどんどんしゃべり続けた。そして聞いてもらいたいことを全て話し終わったときには、もうお弁当が運び込まれる時間になっていた。(ここまで書いてきて、これはあの話と全く同じではないかと気づいた。トットちゃんが初めてトモエ学園に来たときの校長室での出来事と！)

それから私は自分の学生に書かせたのと同じように、自分自身も「英語と私」という作文を書き始めた。「ファリシー先生」「アヒル」「ケネディ」などの記憶にハッキリと刻まれているエピソードを綴っていくうちに、忘れていた出来事が次々と甦ってきて自分でも書くのが楽しくなってきた。この「自分史」を寺島先生にお見せしたところ「とても面白かった。もう30年以上も前にオール・イングリッシュの授業をやらうとした教師がいたとは驚きだった。山田さんは今回のテーマにはうってつけの講師だ」と励ましてもらえた。

私が「書いているとに次々と新たに書きたいこと出てきて不思議な気持ちになります」と話すと、寺島先生は「人間は頭で考えるのではなくて手で考えるんですよ」と言われた。私はその言葉に力づけられて、それからの二週間を次のテーマである大学での実践をまとめることに費やした。

3. 寝ても浮かぶ新たなアイデア **Humans think during sleep.**

大学での実践をまとめているときにも同じことが起こった。書いているとつぎつぎと書き加えたいことが出てくるのである。そしてその日までに書き終えたところを印刷して寝る前にベッドの上で読み返すとまた新たに書きたいことが出て来るといった調子だった。

こんなこともあった。私の頭はたとえ書きたいことがあっても2時間くらいたつと働かなくなる。あるいはそれほど時間が経たなくとも次の文章が出てこずに立ち止まることがある。そういったときはいったん手を休めて身の回りの雑事や家事をやる。すると、もちろん疲労が回復するだけでなく、不思議と新たなアイデアが出て来て、手詰まりだった箇所を乗り越えられることがたびたびあった。再びPCの前に戻り、書き始めるときにはいつも、もう一度これまでに書いた原稿を最初から読み直すのであるが、するとまたもや奇妙なことに、今度はその部分でも言い足りなかったことに気づくのである。

頭は寝ているときにも働いていた。たぶん眠りが浅いときだろうが、書きたいことがふと浮かんでくるのである。そのときは枕元の用紙にメモを取った。ケネディ就任演説の解釈や経済学における「合成の誤謬」の話、あるいはNHKの外国語講座を自分でも一度み

てみよう思ったのもこんなときだった。

また原稿を書き進めているときには朝早くに目が覚めてしまうことが幾たびもあった。そのときは枕元にある本を読んでいた。しばらく読んでいるとまた眠気がきて目覚ましが発鳴るまで眠る。この頃に読んでいたのは『ブラック企業』『フェルメール光の王国』『親はモンスターじゃない』『何者』『弱いロボット』『さっさと不況を終わらせろ』『カラマーズフの妹』といった雑多なジャンルの本だったが、内容に引き込まれて読んでいるときに、ふだんはそんなことを感じたことがないのに、このときは自分をそこに吸い込んでいく文章の仕組みとか、文章の自然な流れのようなものを意識することがあった。これは自分が原稿を書くときにロジックが飛ばないように気を配って「段落改行」「談話標識」「旧情報から新情報へ」といったことをつねに意識していたからではないかと感じる。こんな感覚を持って本を読んだのは初めてだった。

さてここまでで私が講演原稿を執筆中に体験したの奇妙な出来事の話は終わり、次からは講演日の3日前の出来事に話を進めることにする。

4. 「すべて読むべし！」 **Read the whole script !**

私は宮城県に出発する前に一度は自分の書いた講演原稿を寺島先生に見てもらおうと思っていた。「遅くともこの日までには」と考えていた2月19日のお昼前に、小牛田農林高校英語科主任の高橋道子先生から「当日の参加者は25名を越える」という連絡があった。

そこで私はさっそくその人数を寺島先生に報告した。その情報はどの本を何冊ずつ会場に送るかを定めるために必要だったからだ。(寺島先生は講演されるときにはご自身の30冊にも及ぶ著書の中から講演会のテーマにあったものを選んで送っておられる。)私はそのとき自分が書いている講演原稿がいよいよ最後の節にまで入ってきていたので「夜には送付するつもりですのでよろしく願います」と先生にお伝えした。

2月19日深夜、やっと原稿が完成して寺島先生に送付。「40字×40行」で38枚。

翌日の午後に寺島先生から電話をいただく。私は先生から「昨日は夜10時半までメールを待っていた」と聞き、お詫びしたのだが、そのときに私は望外のコメントをもらった。

寺島先生「これは面白い。一気に読めてしまった。予定しているリズムよみワークショップは取りやめて、参加者の方にはこの話をたっぷり聞いてもらったほうがいい。これを聞けば英語嫌いの学生たちがどのように変わって行って生き生きとした姿を取り戻していったのかがよく伝わってくる」

山田「でも向こうの担当者の方はワークショップをやると宣伝してしまっています」

寺島「それなら講演冒頭に寺島がそうしたほうが参加者のためになると言ったと言えがいい」

そのようなやりとりをしているうちに会議の開始時間が迫まり、話の続きは夜にまた電話することになった。寺島先生は「美紀子はまだ読んでいないから、それまでに読んでもらっておく」と言われた。

その日はふたつめの会議が終わるのが遅くなって帰宅も遅くなる。夕食のテーブルで妻に「寺島先生から講演原稿はとても面白かった、一気に読んでしまったと褒められた」と言うと「そうやって励まして送り出してくださるのよ」とつれない返事。全然信じてない！妻（同業者）には話のネタの一部を紹介して感想を聞いてもらっていたのだが、全文は読んでもらっていないので致し方ないのであるが。

5. 中身がおもしろければ伝わる Content is everything.

その夜に再び寺島先生に電話すると美紀子先生も同意見で「全文読むべし」であった。

「ただ読むだけでいい」

「でも本当に原稿を読むだけでいいんですか」

「日本語の表現よみだと思えばいい」

「分かりました。やってみます。でも全て読むと3時間はかかります」

どこを切ったらいいのか、その議論は「どこも削れない、どれも必要だ」から始まった。美紀子先生も電話口で一緒に考えてくださっている。

「第一部の自分史は絶対必要」

「音声指導がテーマだから並べ替えテストのところを削る」

「いやそこにも絶対に落とせないところがある」

「群読は高レベルの実践なので外してはどうか」

「<評価のさじ加減> は実践をやってから悩むところだからカット」

「目で見ないと分からないところは切るで行こう」

「ただ論旨が続くように切らなくてはダメだ」

このようにして読むところはだいたい絞り込まれて行った。

私は昨夜から消えない不安を再び口にする。「講演なのに読んでるだけでいいんですか」寺島先生は「それでいいです。中身が面白ければ必ず聞いてもらえる」と答えて、京都大学で行われた国際シンポジウムで発表されたときのご自身の体験を話された。この国際シンポジウムは日本フランス語教育学会が主催したものでフランス語の同時通訳が付く。

「同時通訳が付くこともあって与えられた時間は20分しかなかった。早口で原稿を読み上げたただけだったが、その後の懇親会では僕のところにばかりに人が集まり、他の発表者に申し訳なく思った」

このときの20分への絞り込みは今回の比ではなく発表間際まで美紀子先生と時間を計りながら最後の最後まで「しぼり読み」を続けられていたということだった。（なおこの

ときの発表原稿をもとに書かれた論文は以下の HP で読むことができる。）

「大学における英語教育を再考する—はたして「英語力＝研究力」「英語力＝経済力」「英語力＝国際力」なのか」（日本フランス語教育学会『紀要』Vol.6, No.2, 2011 : 166-72）

<http://www42.tok2.com/home/ieas/kyotoUniversitySymposium2010.pdf>

6. アシスタント用原稿をつくる **One more scenario**

さて、読むところはだいぶ絞り込まれてきたのだが、講演の中には動画を見せる時間もある。これを見せるか見せないか、見せるなら後どこを削るか。新たな検討課題が次々に出てくる。電話はすでに1時間を越えていた。

寺島「明日の飛行機は何時ですか」

山田「三時にセントレアです」

寺島「美紀子がもう一回読んで考えてくれるから、山田さんも自分でも今日の議論を踏まえて切る箇所をチェックしておいて下さい」

翌日（出発の日）のあさ8時半に寺島先生から電話があった。私は前日に現地に送付した荷物に入れ足りないものを思いついて家を出て大学に向かうところであった。音声関係の自分の論文の抜き刷りを少し余分に持って行こうと思ったのである。寺島先生は「いまは抜き刷りなんか取りに行ってる場合ではない。原稿の短縮と最終チェックに全精力を傾けるべきだ」と言われた。

寺島「山田さんは、時間短縮の方法については何か考えましたか？」

山田「削るところは昨夜の議論をふまえて確認しました。もうひとつ思いついたことがあるのですが、原稿を二人分作って、どなたかにアシスタントとして実物投影と動画再生をやってもらったらどうでしょうか。そうすればロスタイムが少なくなります」

これについては寺島先生も美紀子先生も賛意を示された。

しかしまた別の問題が起きた。それはムーア演説の動画をどこで見せるかという問題である。受話器の向こうから聞こえてくる声を聞くと、どこで見せるかで寺島先生と美紀子先生で意見が分かれている。寺島先生は最初にやれば機械操作のロスタイムが最少になると考え、美紀子先生は話しの流れの中で見せた方が動画についての追加の説明はいらないのでむしろそのままのほうがいいのではないかという意見である。

これは結局、美紀子先生の案が採用された。

寺島先生からは「会が終わった後でもし希望者があっても、リズムよみワークショップはやらないほうがいい」というアドバイスもあった。

これは会を閉じた後に、参加者が個別に講演者に質問したり、あとでゆっくり自分の買

いたい本をみられるようにとの配慮からであった。これまでの寺島先生ご自身の経験から導き出されたアドバイスである。(実際にはこの通りになった。幸運なことに「私の」場合でも同じことが起こったのだ。閉会の後も英語科の先生方が慌ただしく片付けに走り回る中で、私のところに質問に来た方が3人もおられたし、教室の後ろでは並べられた本を手にとって見ている人の姿が幾人もあった。)

この電話はそこまで終わったが、5分後に再び寺島先生から電話が入った。「著書の実物提示は次の本の提示までそのままにしておくとい」と言われ、さらに「このことは講演だけでなく授業づくりにも当てはまりますよ」と付言された。

今回の「高速表現読み」発表においては、参加者は大量の音声情報をレジュメという少ない文字情報を頼りにして理解することになる。そしてこの実物提示はその理解をさらに助ける画像情報となるのである。(実際の講演においては、画面に新しい本が写るたびに書名をメモする人の姿があった。)

7. 到着メールを打った理由

Waiting in patience

寺島先生からの電話のあと私は家を出るギリギリの時間までシナリオを音読しながら分りにくいところに修正を加えていった。このとき自分史「英語と私」大学編に出て来る「ダイナソ」のところでちょっとした駄洒落を思いつく。その当時と今を対比させるダジャレでこれはなかなかいけると自画自賛する。(講演では私のねらい通りにここで笑いが起こった。)

修正はまだ完了していなかったが、未完のまま印刷して旅行鞆に入れた。道中でさらに作業を続ける必要があったからだ。正午に家を出て一路、仙台へ。

仙台から古川駅への新幹線の中で担当者の高橋先生にメール。「こちらに着いています。明日あさ予定通り駅にいます。ところで、学校で一太郎は印刷できますか」

ほどなく「印刷できる」との返信。「これならまだ時間がある」と胸をなで下ろす。

この到着メールは、昨年11月に本学が行った講演会で、当日の朝に到着する予定の講演者にひやひやさせられた経験から必ず打とうと思っていた。高橋先生の携帯番号しか知らなかったが、その番号から初めてSMSメールを打った。アナログ人間の私でも必要に迫られるとなかなかやるもんだと、このときは自分に感心した。

昨年私たちの肝を冷やさせた講師とは誰かというとき詩人のアーサー・ビナードさんである。ところが彼の講演を小牛田農林高校の生徒も聞いていることを知って驚いた。校長室で文芸部顧問の先生からいただいた部誌『雪月雷花』の中にビナードさんの公開授業に参加した記録が載っていたのだ。「日本人は目玉を焼く？」というその記録のタイトルを見て彼によってまた日本語が新たに耕されているのを感じた。

8. 日本人なのに日本語が分からない

Are you a Japanese?

私は最近、ピナードさんが「日本語のメガネ」を通して発見する楽しくかつまた物事の本質をつく「言葉の創造」に惹かれて何冊も彼の本を読んでいるのだが、今回の講演原稿にダジャレを入れたくなかったのは彼の影響があるかもしれない。しかし私は自分自身の貧しい日本語力のために彼が考えるようなオシャレでかつ鋭いダジャレを思いつくことができない。日本人だから日本語ができるわけではない、母語の力は人種や国籍とは無関係なのだということが分かる。

日本語力の貧困と言えどもうひとつ書きたいことがある。というか、書かずにはいられないことがある。講演会の後に開かれた小牛田農林高校英語科の先生方との懇親会のときに聞いた話である。そこで佐々木先生（今回の講演の発案者）から「テレビで話されている日本語が理解できない若者が近頃ふえている」という話を聞いたのだ。「青森県の高校入試では日本語のリスニングテストをずいぶん前から行っている」「県内の看護学校でも入試に日本語の聞き取りテストがある」という驚くべき事実も教えてもらった。

これでは、洋画の字幕が読めないどころではなく吹き替えにしても分からないではないか。私の講演では「<聞く>の陰に<読み>あり」という話もしたのだが、これほどの実態があるとは！ こんな状況では「英語で英語の授業」どころか「日本語で英語の授業」も危ういではないか。いやもっとラディカルに言うならば、「英語の授業」なんかやっている場合ではないのかもしれない。（青森県の入試については、私は後日、青森県教委に電話して聞いてみた。間違いはない。教委の HP には放送台本までアップされている。「いつごろから始まったのですか」と尋ねると 40 代ぐらいの方であろうか「私が受験した頃からありましたよ」という答えが返ってきた。先ほど届いたばかりの『全国高校入試問題・国語 2013 用』（旺文社）を見てみると他には 8 県で実施されていることが分かった。）

贈呈された部誌を読んでもうひとつ驚いたことは、この高校に小森陽一さんが来て特別講義『『羅生門』を読む』を行っていることだった。「二項対立」で読むという方法はなかなか面白そうなので一度彼の本を取り寄せて読んでみたいと思った。（でも「二項対立」だけでは読めないのではないかと内心では思っている。）

また佐々木先生から伺った話では、小森さんはあるクラスでも漱石の『我輩はネコである』を使って「述語動詞を見つける」というワークショップ型授業を行っている。英語にとっての学力とは「日本語」であるという問題意識を持っておられる佐々木先生はこの講演をとてもおもしろかったと評価されていた。（このときの DVD 映像を送っていただくようお願いした。到着が楽しみである。追記：3/11 に DVD 到着。小牛田農林 2 年 1 組での公開授業『我輩はネコである』を観る。机列順に指名して一文ごとに「主・述」を言わせて板書していく。最後は題名を英訳（I am a cat.）し、そしてそれを再び和訳させることで結論へと導いてゆく。生徒たちの真剣な表情も印象的だった。）

さて話を元にもどして、場面を講演前日の宿泊先ホテルにもどす。

私は宿で食事を取ってからは、講演原稿を項目ごとに読み上げて時間を計って記録した。もう少し削らないと与えられている 90 分には収まらない。節の中の付加的段落を見つけ切ってゆく。さらに削除箇所には「青色ゴチ」、実物提示箇所には「赤色ゴチ」という加工を施してアシスタントの人が見やすいように工夫する。作業途中で力尽きて就寝。

講演当日の朝（2月22日）、午前5時から続きの作業を再び始める。最後に寺島先生から指摘されていたレジュメ項目番号の訂正を行ってやるべき仕事をすべて終了。時刻は午前7時だった。私はこのとき、前日の出発日の朝に寺島先生から言われた言葉「いまは原稿チェックに全精力を傾けるときだ」の意味をしみじみを噛みしめることとなった。

9. 「愛してる」とは言えないのに・・・ Masked conversation

午前8時に高橋先生から電話。大雪でJRが動いていないので車でホテルまで迎えに行くとのこと。車中で亀谷DVDが話題に。亀谷先生は全国の高校に配布されたDVDの中でAll in Englishの授業をされている岐阜県の先生である。

私が「手話の所まで見て、どうしてこれを英語の時間にするのかに疑問を持ってそこから先はまだ見てません」というと、彼女は「亀谷さんは英語というよりも他者とコミュニケーションを学ぶという意味を込めてやっている、あの家政科のクラスでは手話を習っているですよ」と教えてくれた。つまり日本語の手話を英語で演じていたのであった。彼女は亀谷さんが二日前に宮城県のある高校で講演されたのを聞きに行ったということだった。その講演の話をもっと聞きたいと思っているうちに車は会場に到着した。

このときの高橋先生との会話でもうひとつ印象に残ったのは、彼女が「日本語より英語の方が自分の気持ちを伝えやすいことがありますね」と話されたことである。これはコミュニケーションな英語の授業をするときの利点として私自身も何度か聞いたことがあった。生徒自身が実際にこのように言うことも確かにある。

これは一体どういうことだろうか。そんなことが本当にあり得るのであろうか。寺島先生の文献にもきつとこのことに言及したところがあると思うが、まずは自分の頭で考えてみる。

自分の気持ちはきっと母語である日本語で考えているはずである。でもそれを口にするときに英語を使うということは、自分の気持ちをそのまま出たくないからではないか。日本語なら気持ちがそのままストレートに表せてしまう。英語ならば表現する言葉は限定されていて選択肢は狭まる。不自由なのにあって英語を選択するのはなぜなんだろうか。自分の気持ちを本当は相手に知られたくないのか？

頭が少し混乱してきて、妻に聞くと「日本語だと何か気恥ずかしいんじゃないの」との返答。「君を愛してる」とは言えないのにI love you.とは言えるようなものか。ただこれ

はもう「アイ・ラブ・ユー」という日本語になっているからもう英語ではないような気がするが。意味をあいまいにしたいときに使うカタカナ語と似ている。

意思疎通が最優先であるはずのコミュニケーションにおいてわざわざ自分の気持ちが伝わりにくい言葉を選ぶことをどのように考えたらいいのであろうか。この「自分の気持ちをそのまま出したくない」「自分の気持ちを本当は相手に知られたくない」という私の分析について寺島先生のお考えを伺ったところ、先生は「おそらくそうなんだろうね。いわば〈仮面をかぶった会話〉だね」と言われた。「仮面をかぶった会話」— それは殺伐とした社会を生きていくために子どもたちが身につけた技なのだろうか。

10. 日本語を耕す英語の授業

The moon is beautiful.

そんなことを考えているうち、以前に読んだ夏目漱石の話を思い出した。漱石が I love you. という英語を学生に和訳させたときの話である。学生が「我、汝を愛す」と答えると、漱石はそういうときは日本語では「月がきれいですね」と訳すものだと論じたというのである。ちなみに二葉亭四迷は「私、死んでもいいわ」だそうだ。[出典『日本人の 9 割に英語は知らない』(成毛眞、2011)] (ここからは蛇足のなので読み飛ばしてもらっていいが、この話を本学のある先生(専門は倫理学)にしたところ、「いいだろ?」という訳もあるとのこと。明治は遠くなりにはけり!)

このふたりの明治の文学者は I love you. という「英語のメガネ」(アーサー・ビナード流表現)を通して日本語を再発見したのでないかと思う。「月が…」にしても「死んでも…」にしても元々日本語にあったのだが、I love you. の意味として登場することで新たな意味を獲得した、つまりは日本語が豊かになったのである。英語を学ぶことが「母語を耕す」(寺島隆吉 2009『英語教育が亡びるとき』)ことに繋がる好例だろう。

私の言いたいことは、日本語を使えば、英語で言うよりももっとたくさんの表現を使えてコミュニケーションが豊かで実りあるものになるのではないかということである。この漱石と四迷の話の真贋は定かではないが、多様な感情を表現できるに足る豊かな日本語の力こそをつけるべきなのではないか。(そんなことを言っていると、英語教育はもういらぬのか、おまえの仕事がなくなるぞ、という声が聞こえてきそうだが、それについては英語教育の目的のとらえ方が異なるとだけ述べて、ここではそれ以上触れない。)

何かのテーマについて英語で話すならば、自分自身の考えを日本語ほど十分に伝えることができないのは自明である。英語教師ならば英語で自分の考えを完全には相手につたえきれないもどかしさを感じたことは誰にもあるはずである。

そんな意地の悪い言い方をするな、「英語で」話していること自体が大事なのであって英語で「何か」を話していれば、それだけ英語を使うわけだから、だんだん英語ができるようになってくる、「何か」の中身なんかは当面はそんなに気にすることはないんだ、という反論が聞こえてきそうだが、そうやって学んでいる学習者の姿は 22 歳のときの私自

身と見事に重なってくるのである。

11. 「全て英語」で見えないもの I was laughing together, but...

ここまで書いてきて私は亀谷先生の DVD の残りも見てみようと思った。その映像の最後に4人のグループを作ってそれぞれが自分の意見を英語で言うところがあった。授業のクライマックスとも言うべきところである。ここでは生徒が自分がローザ・パークスだったと想像して (If I were her, ...)、席を立つか立たないか、自分の意見を言うのである。

最初の方で使われていた表現は決まったパターンのものであったが、最後に述べる「立たない理由」については教科書の英文を指し示してそれを読み上げていた。そのように教科書の英文を引用して使っているところはなかなか工夫されていると感じたのだが、一方でそのような英文を組み立てられる英語力こそが必要ではないかという印象も持った。

映像に映っている生徒たちの表情は、そこで確認できる限りにおいては、どれも生き生きとして楽しそうに会話を楽しんでいるように見えた。女子ばかりのクラスで、彼女たちのにこやかな笑顔と真剣に取り組む表情の両方がそこにはあった。しかし私はそれを見ていてふとある言葉を思い出していた。

昔、全部英語で授業をしていたときに、最後のアンケートで生徒に「自分は実はわからなくて、友だちに合わせて笑ったり反応していた。すごくつらかった」と書かれたことがあります。大切なことは、生徒が安心して聞ける英語で子どもと共同で授業の中の英語を増やしていくという感覚なんじゃないかと思っています。

これは英語達人と言われた中学教師・田尻悟郎さんの言葉で、寺島先生の『英語教育が亡びるとき』の中で紹介されているものだ。中学校の英語ですらこのような状況があるとすれば、それよりももっと難しい高校のテキストを使っているクラスにおいてはなおさらである。40年前にオール・イングリッシュの英会話授業で顔面蒼白だった「山田君」はどこの教室にもいるのではないだろうか。

この授業は様々な活動が織り込まれていて変化に富んでいるが、その中の指示や説明を必ずしも全て英語で行う必要はないと私は思う。英語の指示のあとで日本語で補えば、生徒は教師の指示をより明確に理解できるし、教師自身も自分の英語をひとつひとつ確認しながら言うことができる。生徒も教師もリラックスすれば、教室の affective filter (情意障壁) は薄くなり学習者が学びやすい雰囲気は自然と生まれてくる。文科省も英語活動を英語で行うことは「努力事項」と言っているのだから、教師は学習者の実態に合わせて柔軟にそれを行えばいいのである。

また、生徒が自分の思いを英語では伝えきれないときには日本語を使っていいということになっていれば、「立つ理由」「立たない理由」を教科書の英文を指し示して述べた後で生徒それぞれが自分独自の意見や気持ちを言い添えることもできる。そうすればその授

業に奥行きとふくらみが出てくるだろう。英語で言えなくてその理由をすべて日本語で言った生徒の意見がいちばん面白いということも起こりうるかもしれない。

12. 教科書教材の限界 **Too short for the whole story**

最後にもうひとつ述べるならば、これは授業の進め方とは直接には関係ないことだが、私はこの英文テキストを一度読んでみたいと思った。というのは最近 **DemocracyNow!** という番組でローザ・パークス生誕百周年を記念した放送があり、そこに出演したジャンヌ・セオハリスという女性歴史家が「彼女を事件当日のただ一回だけの行動で説明することで、その前後にある彼女の豊かな抵抗の歴史を見ないのならば、彼女の遺したものをないがしろにすることになる」と語っていたからだ。

これはヘレン・ケラーが三重苦を克服した偉人という側面だけが強調され、彼女が社会主義者として婦人参政権運動に参加したり第一次世界大戦にも堂々と反対した女性であることがほとんど語られないのによく似ている。果たしてこの教科書はどんなふうに彼女の生涯を描いているのか、興味あるところである。

(なお、ヘレン・ケラーが第 1 次世界大戦のときに行った「反戦ストライキ」を呼びかける演説は『肉声でつづる民衆のアメリカ史』(上巻)で読むことができる。この本はアメリカの歴史家ハワード・ジン他が編集・執筆した"Voices of a People's History of the United States"を寺島先生ご夫妻が 5 年の歳月をかけて翻訳し昨年 6 月に出版されたものである。上巻・下巻で 1372 頁ある。

ちなみに、岐阜であったアーサー・ビナードさんの講演会のおりに寺島先生が "Voices of ~" を翻訳したと話したところ、彼は「えー！ あんな分厚い本を翻訳したのですか！」と目玉を丸くして、もとい、目を丸くして驚いたようだ。)

このように書いて数日後のこと、この教科書を本文を実際に見ることができた。本文の長さから考えると、おそらくは原典である"**Rosa Parks — Pioneer of Civil Rights**"からの抜粋であろう。本文の大部分がインタビューにおける彼女の言葉の引用である。与えられたスペースを見ると「彼女の豊かな抵抗の歴史」まで書き込むスペースがあるようには思えなかった。レッスン毎に話が変わる教科書においては仮に教科書執筆者がそういった歴史を書き入れようとしてもページの制約からそれは叶わないのだろう。

13. ローザ・パークス夫人の描き方 **Not just a tired seamstress**

ローザ・パークスについては私自身がこれまでに扱った教材の中でも出てきた。彼女が 92 歳の生涯を閉じた 2005 年の翌年に、キング牧師がこのバス・ボイコット事件のことを書いた"**Stride Toward Freedom**" (1958) (邦訳『自由への大いなる歩み』) の一部分を読ませている。いまその英文を読み返してみると、キングのパークス婦人像といま紹介した歴史家ジャンヌ・セオハリスのものが少し異なっていることが分かり興味深い。

当時 26 歳のキングは、彼女が 1955 年 12 月にとった勇気ある行動は彼女が書記をしていた NAACP(全国黒人地位向上協会)によって指示されたのではなく、彼女自身の内な

る声によって、言い換えれば「時代精神 *Zeitgeist*」によって引き起こされたと述べている。また彼女の人となりについては人格的に高潔で(a charming person with a radiant personality)、尊敬すべき人間(one of the most respected people)であったと述べている。

もちろんこれらの記述に何か間違いがあるわけではないが、キングの記述は彼女の人柄や黒人コミュニティでの評判に焦点が当てられている。ところが、歴史家ジャンヌ・セオハリスはパークス婦人の次のような「前歴」にも着目して、何がそのときの勇気ある行動を引き起こしたのかを解明している。

- ① 10 年前にも料金支払いのルール（前から乗って料金を支払ってから下車してまた後ろから乗る）に従わずバス乗車を拒否されていたこと
- ② 彼女が協会の書記としてスコッツボロ事件を支援する募金を集めていたこと（『肉声でつづる民衆のアメリカ史』上巻 572-8 頁に事件の詳細が語られている）
- ③ 同年 8 月にハイランダー民衆学校 (Highlander Folk School) で白人も含めた 48 人と寝食をともに生活し、差別 撤廃問題について議論していること

このような「前歴」を見ると、パークス婦人が以前から「行動の人」であり、さらにその行動を支える理論も学んで自分自身を鍛えていたことが分かる。席を立たなかった彼女は単なる「仕事で疲れていたお針子さん a tired seamstress」ではなく、ずっと前から社会の矛盾に立ち向かっていた「第一級の活動家 a first-class activist」だったのである。しかしこのバス・ボイコット運動の中では、彼女をそのような活動家としてではなく「勇気をふりしぼって立ち上がったひとりのふつうの女性」としておいたほうが好都合だったのかもしれない。キング牧師のパークス像はそんな意図が反映されているような気がする。

（ここまで書いてから、関連するテーマを寺島先生が『キングで学ぶ英語のリズム』第 1 部補章第 10 節で論じていることが分かった。偶然にもどちらにもパークス夫人について言及した言葉があったのだが、私が「ひとりのふつうの女性」としたところを寺島先生は「一介の平凡な黒人女性」とされていた。日本語力の歴然とした差を今更ながら痛感した。）

いずれにしても、教師が生徒に「席を立たない」「席を立つ」の選択をさせるときには、少なくともそのような歴史的事実（その後パークス夫妻は 2 人とも失職し 2 年後にはデトロイトに転居しなくてはならなかった事実も含めて）を生徒に伝えておく必要があるのではないだろうか。歴史家ジャンヌ・セオハリスのインタビューを通して私は今回はじめてそんなことも考えた。

（寺島先生はこの「席を立たない」「席を立つ」の選択に関して、上記のような歴史的事実に加えて、教師みずからが生徒に語ってやれる体験があるとより身近な問題として生徒に考えさせることができ、この選択が単なる「道徳的判断」に陥ることを防げるのではないかと指摘され、ご自身の経験を話された。「私はモントゴメリーの地をおとずれ実際に黒人の人たちが歩いた道を自分の足で歩いてみたが、暑くて暑くてとても歩き続けることは

できなかった。彼らがこれを 380 日間も続けたことがいかに大変なことだったかを身をもって知った。」なお寺島先生の『国際理解の歩き方』には「キングとマルコム」など他にも非常に興味あるエピソードが書かれている。さらに寺島先生は当時のことを 1 人の白人女性の視点でとらえた映画『The Long Walk Home』（1990、米国）も紹介された。この映画ではウーピー・ゴールドバーグ演じる黒人女性オデッサが長い道のりを足に血豆を作りながら（雨の日はずぶ濡れになりながら）歩き続けた様子が描かれている。）

ずいぶん長い道草になってしまったが、場面を講演当日 2 月 22 日午前の小牛田農林高校に移す。

14. 画面がずれたプロジェクター Standing on the disaster site

小牛田農林高校に到着した私は、校長先生への挨拶を終えてからすぐに会場の LL 室に入った。すでに前日に到着した書籍が後ろにきれいに並べられている。さっそく持参したノートパソコンを接続して動画を再生する、画像は映るのだが音声小さいので急遽スピーカーを持ってきてもらう。実物投影機と PC 画像の切り替えの確認。画像は正面のスクリーン、教室天井の宙づりテレビに加えて、各デスクにある小さなモニターでも映ることが分かる。最終シナリオ、最終レジュメの印刷完了。受付にすでに並んでいたレジュメと差し替え。

英語科主任の高橋先生、この講演を発案された佐々木先生だけでなく、佐藤先生や ALT のジェイムズさん、さらには試験監督の合間をぬって佐竹先生も会場に駆けつけてこられて、英語科スタッフ総出で準備を手伝ってくださっている。

高橋先生と私は印刷されたばかりのシナリオを使って実物投影の箇所と実物の本を確認していく。高橋先生は本当は受付の仕事だったにもかかわらず無理を言ってお願いすることになってしまった。足りない本が出てきたので後ろに並んでいる本や佐々木先生の蔵書を持ってきてもらって対応した。

打ち合わせの後で高橋先生から当日配布の資料を見せてもらう。当日にも申し込みがあり参加者は 41 名。42 席の LL 室はほぼ満席である。ところが、この資料を見て私の持ち時間が 105 分であることが判明。このことは前もって送ってもらっていた実施要項にも書いてあった。こんな重要なことをいい加減に計算するとは！ 寺島先生と美紀子先生に余計な心配をさせたことを申し訳なく思う。

プロジェクターの写す画像が上方にずれている。3.11 の地震のときにずれましたと高橋先生。彼女の案内でこの部屋に来る途中でも、この大きなロッカーが倒れたんですよ、もし生徒がここにいたら大変なことになっていました、校舎の二階をつなぐ通路も壊れて長いこと生徒が不自由な思いをしました、という話も聞いた。彼女はそんな話をさらりと語られたが、当時はきっと大変な思いをされたに違いない。いまは整然として見える情景の中で私はいま自分があの巨大地震が襲った地に立っていることを実感していた。

15. うなづきながら聞く顔 Messages Are Reaching.

正午までにはほぼ準備が整い、お昼休みは校長室で英語科の先生方と美味しいお弁当をいただく。校長室に入るのはそのときが二回目だったが、そのときそこには巨大なバナナの木の本があることに気づく。葉が天井につっかえて曲がっている。ここは農業高校なんだなと実感した瞬間であった。

そうこうするうちに講演開始時間となった。会場の LL 室は前のほうにわずかに空席があるものの後ろの席までほぼ満席である。司会者の佐竹先生が挨拶をされた後で教頭先生による講師紹介がありいよいよ私の出番となった。

「講演は模擬授業ですよ」という寺島先生の言葉が頭に浮かぶ。私は新米教師のときの失敗も思い起こしながら前から二列目あたりに立ち位置をとる。原稿用紙を片手に読み始める。最初にワークショップ取りやめの理由を説明してからいよいよ本論に入る。

「私が大学に入学してから・・・」で始まった読み上げはすぐに「高速表現よみモード」に入る。地の文と会話文を読み分ける。学生の作文は学生になったつもりで読む。問いを発した後は少し間をおく。キーワードは強く読む。

「ダイナソ」のところに仕込んだダジャレに最初の反応あり。原稿を読むのは老眼鏡なので遠くの方ははっきりとは見えないが、参加者の中にはこちらを見てうなづきながら話を聞いている女性がいるのに気がつく。次の「笑い」は新米教師のときの失敗エピソードで起こる。さらに私の「高速表現よみ」は続く。

自分史をほぼ 40 分で読み切った後はマイケル・ムーアの動画で 6 分の休息。この休息のなんとありがたかったことか！ トイレに行きたくなるといけないので水分補給は最小限にとどめ、そして後半部に入る。またもノンストップで読み続ける。

後半部は削除された青地のところが次々と現れてくる。自分でも論旨が本当に繋がっているのかを頭の中で確認しながら読んでいく。ときどき「次は、2 の 2 の 5 です」などと目次番号を言いながら読み進めていった。そしてついに最後の節まで来た。

16. 「それでは話が終わりません」 Unexpected Answers

ここで初めて参加者の持っている資料を開いてもらうように指示した。すべての参加者が全員が資料 15 番を開くのを待つ。私はやっここまで来たという安堵感から「新任のころの私は指示したところを生徒全員が開くのを待つことができませんでした」と余裕のアドリブを入れながら、昨年 7 月に法学部 1 年の女子学生が書いた作文を読み始める。

二百枚以上はあった学生レポートからこの彼女の作文を見つけられたのは幸運だった。というのはこの作文のは改行された段落ごとに「リズムよみ」「視写」「語順」「映画の感

想」というテーマにそって自分の成長の様子や発見が綴られていて、しかもその中には「たのしく」「楽しい」「楽しんで」と言う言葉が3回も使われていたのである。

私はこの言葉を探すことをクイズにして、その答えをもらってから、今日の結論は「英語は楽しく学ぶ」です、と締めくくるつもりだった。ところがそうは問屋が卸さなかった。

「実はこの作文の中で、ある言葉が3回使われています。今日の話の結論にしたいと思っている言葉です。さてそれは何でしょうか？」こう私が問いかけると後ろの方に座っておられた女性が「リズム」ですと答えられた。私は困ってしまった。

「それも3回出てくるんですか。でもそれは想定外の答えでして、別の答えをお願いできませんか」と言うと爆笑が起こる。また挙手してもらって答えてもらおうと、今度は「苦手」という答えが出る。「いやー、これでは終われないのです」でまた爆笑。「どなたか誰か正解をお願いします」と懇願しやっと1人の参加者の方から正解を言ってもらえた。

かくして私の講演は終わり、席にもどると予定終了時間の5分前だった。とにもかくにも100分の高速表現よみは終わった。次節からは質疑応答のときの様子を書いていく。

17. 「セン」をひとまとめ

Don't break the basic.

最初に質問者されたのは前から4列目の左側の席に座っておられた女性で、いつも私の方をみてうなづきながら聞いておられた方である。その方の質問は「センになるものをまとめて与えておくというところをもう一度詳しく説明してほしい」というものであった。

私は Wisconsin or America is broke or broken. という例文をあげて、「センになるものをまとめる」とは例えば、[America, broke, broken, is, or, Wisconsin]のように一語一語バラバラの語群を与えるのではなく、[broke or broken, Wisconsin or America, is]のようにセンの部分にあたる「主部」や「補語」をまとめて語群として与えることであると説明した。

さらに私は自分が長い間「センマルセン」について頭で分かっているつもりだったのに、教材作りにおいてはそれを上手く使えなかったと自己分析した。いま少し落ち着いてこのことを考えてみると、それは知識として強弱のリズムを知っているが、実際にはそのように読めない生徒と同じではないかと思った。

さらに私はこの「完成した」テストについて寺島先生から指摘された問題点についても触れた。それは私のテストが2文に対して1つの語群を与えていてまだ難しすぎるということである。ひとつの英文に対してひとつの語句群を与えたときにこの「並べ替えテスト」はやっと完成することになるのである。

この質問者の方は、会が閉じた後にも私のところに来られて「私も山田先生と同じように困難校のときに寺島先生の本と出会って救われたものです。今は進学校ですが、記号付

けはそこでも役立っていますよ。ある教え子が予備校でもその記号を使って英語を勉強して今年、中央大学に受かりました」と話され、そのとき私は初めてその女性が記号づけの実践者であることを知った。

18. リズム記号と「切れ」の位置 Not just the way they are

次に質問の手を挙げた方は高橋先生であった。彼女は講演中わたしのアシスタントとして書画カメラにつきっきりだったのだが、今度は一参加者として反対側の席から要望を出されたのだった。そこで私は資料につけていたマイケル・ムーアの演説第1段落を参加者の方に読んでもらうことにした。

私のあとについて最初の2文を読んでもらったところでペン打ちをしていない人がいるのに気づいたので、ペンを持って読んでくださいと指示した。私は英文を見ていて参加者の方を見る余裕がなく返ってくる声と打音だけを聞いていたが、フレーズの中に強の記号がひとつだけのところはリズムが取りにくくて声が揃わなかった。マイケル・ムーアの演説をそのままリズム記号に写し取るとそのようになるのであるが、リズムの練習としてはやはり打音ポイントを増やしたほうがいいのではないかと思った。

 . . . □ . . ○ . □ .
It has been transferred → It has been transferred

(註：ムーアは trans-fer を第1音節で強く読んでいるのでリズムの流れから追加打点ポイントを has にしたが、通常はこの単語のアクセントは第2音節にあるのでその場合は been が追加打点ポイントとなるだろう。)

もうひとつ気づいたことは意味の切れ目と音声の切れ目を必ずしも一致させなくてもよいのではないかということである。例えば、以下の文では contrary の一語だけで切っていたのだが、もう少し先まで言ってから「切れ」を入れるのである。

□ . . . □ □ . □ . . □ . . . □
Contrary | to what those in power would like you to believe
正反対です 権力を持った人たちが皆さんに思わせたいこととは



□ . . . □ □ . □ . . □ . . . □
Contrary to what those in power | would like you to believe
正反対です 権力を持った人たちが 皆さんに思わせたいこととは

または

□ . . . □ □ . □ . . □ . . . □
Contrary to what | those in power would like you to believe
正反対です 権力を持った人たちが 皆さんに思わせたいこととは

実際のプリント作りにおいてどのようにするかは今後の実践において確かめていく必要があるだろう。これは夜の懇親会のとときに高橋先生ご自身が質問されたこととよく似ている問題である。このとき彼女は I agree with you をどこで切るのかという質問をされた。英文の構造から考えれば当然、I agree | with you となるのだが、実際の音声では I agree with | you on that point. と聞こえることもあるからである。(もちろんこの場合は誰に同意するのかを話者が you なのか him あるいは her なのかを少し考えていて you と発話する場合に現れる「切れ」であるが。) それはちょうど I know that he is kind. という文で that の前で切るか後ろで切るかという問題と同じである。

この問題については寺島先生が『チャップリン「独裁者」で学ぶ英音法』の中で到達した結論を 10 項目にわたって挙げている。(同書 pp.109-110) ここではその最初の 3 項目のみを以下に示す。

- ①文における Sense Group が必ずしも Breath Group に一致しないのと同じように、文章段落と音声段落も一致するとは限らない。
- ②しかしゆっくりと明瞭に発話(あるいは朗読)される場合、Sense Group と Breath Group、文章段落と音声段落は一致する。
- ③すなわち自分がゆっくり明瞭に話すための英音法と、早い発話を聴いたり、細かな陰影を表現したり聴き分けたりするための英音法とは区別されてよい。(以下省略)

先の例文を例に取るならば、I agree with | you on that point. という「切れ」は「もちろんこの場合は…」で書いたような文脈、すなわち「細かな陰影を表現したり聴き分けたりするため」のものであると言えるだろう。

19. わざわい転じて

Good luck after bad one

このマイケル・ムーア演説第 1 段落のリズムよみは一回だけ行った。そのときに私はもっとリズムよみがやりやすい英文でこれを行ったほうがいいことに気づいた。そこで講演の中で引用した映画『レ・ミゼラブル』の中の曲の一節を手元のモニターに出してもらって使うことにした。しかしこのとき私は参加者の方に読んでもらうようには促さずに自分だけでリズムよみする(歌う)ことにすることになってしまった。(参加者の方は私に合わせてリズムを刻んでいてくれたのだが。)

- ♪ Look down, look down, don't look them in the eyes.
Look down, look down, you are here until you die.
The sun is strong, it's hot as hell below.
Look down, look down, there's twenty years to go.

後悔先に立たずであるが、わたしはここでモニターの画面を使って、何も書き添えられていなし英文の上に、その場で記号を付けてみせることもできたのではないかと反省している。例えば、最初に look down に □□ をつけて、その後で最初の □ を小さな □ に変え

るのである。このようにしてまず内容語に□、機能語に○をつけた後で、読みながらそれを修正していけばリズム記号を実際につける方法を説明できたのではないかと思う。

□ □ □ □ ○ □ ○ ○ ○ □
Look down, look down, don't look them in the eyes.

↓

□ □ □ □ ○ □ ○ ○ ○ □
Look down, look down, don't look them in the eyes.

このような不十分なリズムよみ実演であったが、この不満足な実演もひとつのきっかけとなったのであろう、3月末には佐々木先生が中心になって小牛田農林高校においてリズムよみワークショップが開催されるとことになったという嬉しい便りが届いている。「禍転じて福となす」というのはまさにこのことであろう。

20. 教科書の「リズムよみ」実践術 Transferable ability

次に質問した方は「リズムよみは今回はじめて知った、話を聞いてその素晴らしさは分かったのだが、実際に授業にはどのように取り入れて、どのような活動につなげていったらいいのか教えてほしい」と話された。このような質問が出ることはまさに寺島先生が予言しておられたことであった。

その予言とは「この原稿を読めば必ずやリズムよみをやりたいという人が出て来る、ワークショップについてはそれをやってくれという要求が後で必ず出て来る」というものだったが、いま述べた有志によるリズムよみワークショップの開催もまさにこの予言の通りであった。

その質問に対しては、私は山県高校で自主編成した冊子を見せながら、教科書の英文の音声課題としては「リズムよみ」の後に「教科書よみ（白文よみ）」「(和訳の)英訳よみ」といった発展課題を設定することができることを紹介した。その際、この冊子では本文読解のための記号づけだけでなく、課末にある練習問題も記号づけ方式によって編集してあるので参考にしてほしいと言った。

私の説明はこの程度で終わらざるをえなかったが、これから実際にこのメソッドで授業を作っていこうとするならば、私がそうであったように、寺島先生の本を読み(私たちは幸運にも寺島先生から直接に指導を受ける機会を定期的に持つこともできた)、実践者がお互いに交流しながら進めていく必要が出てくるであろう。小牛田農林の佐々木先生や一人目の質問者であった小山先生、その他の有志の方々が核となって、より多くの先生方にこの実践が広まってほしいと思った。

いま私がここで説明した音声課題の発展のさせかたについては、寺島先生から次のようなコメントももらっている所以で以下に紹介する。

① 教科書英文のリズムよみは全文で行う必要はない。配当時間、英文量の多寡などの条件によって一部分だけ行ってもいっこうに構わない。これは「転移する学力」を養うという観点から音声課題を捉えているからである。

② しかし、「これは面白い、生徒にぜひ何度でも読ませてその内容について考えさせたいという英文であれば、「通しよみ」（または「合わせよみ」）→「表現よみ」を発展課題として設定してと取り組ませるとよい。

（なお、「通しよみ」とはいくつかの段落を通して一気に読む「リズムよみ」である。また「合わせよみ」とは音声テープに合わせて英文を1秒遅れに読んでいく、一種のシャドウイングである。）

これらについては『キングで学ぶ英語のリズム』の第2部、『チャップリン「表現よみ」への挑戦』で実践の具体的な手順が書かれている。どちらの本も寺島先生の1997年の著書である。（②について付言すれば、先述の私の回答については私自身が山県高校で行っていた授業ではまだここまでの実践レベルには到達していなかったことを示している。ただこの方法であってもフレーズ単位の視写と組み合わせることによって生徒たちに前向きの変化を生み出すことが確認されている。拙著『授業は発見だ』第7章参照）

21. 重箱のすみ

Start from the Basic.

最後の質問は、文法のテキストを使って授業をしているのだが、予習させて、当てて答えさせるだけの授業になっているのをどうしたらいいかというものであった。私自身がこのようなテキストを使って授業を行ったのは、もしあるとすれば初任校のときだけなのだが、何も思い出せない。その場では寺島先生の「知的好奇心をかきたてる英文法」（『英語にとって文法とは何か』序章）を紹介してから、思いつくままに「受動態と完了形の話」や「言語によって相や態の表し方が異なる話」などをしたのだが、最後はこのような答えでは質問者の要望には答えていないと感じて、「自分はそのような授業を実際にやったことがないのでうまく答えられません。宿題にしてください」と言って終わった。

ところがその質問者の女性の先生は閉会の後に私のところに来られてじっくりと話すことができた。「重箱の隅をつついてばかりの文法の授業でほんとに嫌になります。」「そうですね、それに気づいていない人はいいけど、それが分かると教えるのはつらくなりますね」などを話しているうちに私は英文法のテキストには英作文の問題があることを思い出した。

私はそこに出ている日本語を英語の語順に並べ替えできるような不自然な日本語にして生徒に与え、語順訳欄に日本語で穴埋めさせること、さらに例文として出てくる英文についても訳をさせるのではなく同様な手順を踏んで穴埋めをすることを提案した。

「例えば、**That's right.**という英文はこのプリントのフレーズ訳（ムーア演説の段落1）では〈そうなんです〉という訳になってますが、〈それは正しいのである〉とすれば、〈それ・ある・正しい〉と並べ替えることができますね。テキストに出てくる英文にもすべて

そんな日本語訳をあたえて、日本語で語順訳欄の穴埋めをさせれば英語の語順のしくみが分かってどの文もセンマルセンだということが分かるでしょ。そうやって語順の幹を教えるから、様々な動詞句の形を教えていくようにしたらどうでしょうか」

質問者の女性はこのような説明を私から聞いた後で山県高校の冊子の中から練習問題の部分を何枚かコピーされて持って帰られた。いま落ち着いて考えてみると、野澤先生の『ドラマ』の第3部や岩井先生の『トキメキ』の第3章第1節の該当箇所を開いて説明することもできたのではないかと悔やまれる。

以上のような質問者への回答を読まれた寺島先生から次のようなコメントをさせていただいたので以下に紹介する。

- ① 英文法の指導において最も重要なのは教師自身はその幹と枝葉を分けてとらえることである。「読み書きの構造表」(『英語にとって文法とは何か』第4章)、『英語授業への挑戦』(寺島美紀子、1990)の第1章を読むことを勧めたい。とりわけ、25ページに掲載されている文法項目の構造表は必見である。
- ② 日本語を英語にしやすい日本語にしてみることは、『センとマルとセンで英語が好きに変わる本』(寺島隆吉・寺島美紀子、2004)を読んでほしい。前半の理論編だけでも読めば、英会話の基礎は英作文であり、その英作文の基礎は「日本語を日本語で言い換える力」であることがよく理解できるはずである。

22. あっという間の三時間

Had I had a recorder

こんなふうにして私の講演はいくつかの悔恨を残しながらもなんとか無事に終わることができた。またその夜の懇親会では小牛田農林高校英語科の先生方と本当に楽しいときを過ごすことができた。英語の授業だけでなく広く英語教育全般に関わる問題も語り合うことができて、あっという間の三時間だった。本稿ではそこでの話の一端しか紹介できなかったが、私は途中でなんと手元に録音機がないことを悔やんだかしのれない。それほど楽しく充実した語り合いであった。

ホテルの部屋に落ち着いたときにはすでに午後9時半を回っていたが、きっと心配しておられるにちがいない寺島先生のお宅に電話を入れ「無事終わりました、質問も出ました」とだけ短い報告をした。その夜は戻ったときに宿舎ロビーで飲んだコーヒーのせいだろうか、ちっとも寝付けなかった。そこでやおらPCを立ち上げて懇親会のときの記憶をメモし始めたのだが、それがこの文章をまとめるきっかけとなった。脇道に逸れてばかりの長い長い報告記だったが、ここまで読んでいただいた方には感謝したい。もし何か感想や質問などがあれば syouzi@alice.asahi-u.ac.jp までどうぞ。(2013/03/14)